巴里発

départ de Paris

千田百里句集

Momori Chida

百里さんの句で、すぐに思い出すのは、句集名にもなった、

巴里発
衛星経由の
御慶かな

の句や、

星今宵
ハイデルベルグ
より手紙

などで、洒落たモダンな句をつくられる方だが、常に俳句の新しさを求め、まだだれもが詠んだことのない素材などもサラッと詠みこなしてしまう。

ただそれも単なる興味本位な素材主義に終わることなく、女性らしい風雅な感性をもって裏打ちしている。

能村研三

著者略歴

千田百里（ちだ・ももり）　　本名　キミ子

昭和 13 年 8 月　埼玉生れ

昭和 63 年より作句、「沖」に入会

平成 6 年　「沖」新人賞受賞、同人に推さる

平成 7 年　俳人協会会員

現在、俳人協会幹事

沖・同人会幹事・編集部

句集　巴里発

著者　千田百里

発行　一九九九年一〇月二九日

発行所　ふらんす堂

〒182-0002　東京都調布市仙川町

一-九-六一-一〇二

巴里発の出でて明らか星月夜

登四郎

かくし絵のごとく鳩ゐる夕桜

向ひホームのあくびをもらひ桜まじ

電送紙の巻ぐせに置くサングラス

母とゐて夏座布団の洋間かな

横書きの名刺に替へて九月かな

海に向き何も見てゐぬ秋思かな

誘はれて手の濡れしまま後の月

地上への出口木枯入るところ

税すこし戻るはずなり亀鳴けり

花びらをかはして豆腐掬はるる

波うてるお東さんの夏畳

更けてなほ鵜川のほてりしづまらず

芹の水跳んでをんなの盛り過ぐ

がやがやと谷中を歩く暮春かな

界隈の路地をそらんじあなご鮨

水をやる手許だけ見え吊葱

透明なアリバイを持ちかたつむり

夜も匂ふ森林浴の髪梳けば

走馬燈一度は見たき己れの背

速達を扉口で開く十三夜

しまふ気のなき船宿のすだれかな

ケンタッキーおじさんを撫で七五三

殻牡蠣の海を忘れぬ間に届く

煤逃と見越し買物メモ渡す

巴里発衛星経由の御慶かな

雪だるま生みの親みる目をもらふ

活断層ゆるめて蕗の薹出づる

こざかしや落つると見えて揚雲雀

ふらここの鉄鎖の匂ふ百日紅

星燦々マリアカラスといふばらに

樟大樹溺るるほどに小鳥来て

月見舟酌まねば流人にも似たる

露はしる樟の添木のぎいと鳴り

街に出るただそれだけのクリスマス

ひとつ根に朴四五幹の淑気かな

白梅の爽気に鯉の浮上せり

乗り継ぎの後手にまはりぬ梅日和

春愁をたとふればすり硝子かな

水ぬるむにはとり白きまぶた閉ぢ

しだれともしなだれかとも夕桜

アボガドが卓に巣籠り聖五月

普賢妙見呼び交すかに霧走る

埋み火をいくつ置き来し華甲かな

葛湯吹くふたりで吹いてなほさびし

南都見て北都に泊つるしぐれかな